

## 中伊豆・別府リハビリテーションセンターによる 介護ノウハウ等の提供について

調査研究第二部 泉田 富雄

### はじめに

平成18年4月の公的介護保険の見直しにより、JAの介護サービス事業においても、一層の利用者へのサービスの質の維持・向上と安定して着実に展開でき、かつ“変化”に耐える事業経営が大きな課題となっている。

JA共済は、従来からJAの高齢者福祉活動に可能な範囲で支援等を行ってきているが、このような状況もふまえて、JA共済が保有している資源をより活用し、高齢化のすすむ農村部等で活動するJAの介護サービスを支援することとした。

具体的には、平成19年度下期からJAの介護サービスの質の維持・向上に役立てることを目的として、中伊豆、別府の両リハビリテーションセンター\*の介護ノウハウ等を希望するJAに対して提供することを開始した。

以下においてこの実施事例や支援内容等について紹介することとしたい。

\* 社会福祉法人 農協共済中伊豆リハビリテーションセンター、同別府リハビリテーションセンターを示す（以降、リハビリセンターとする）

### 1. JAの介護サービスの実態調査について

リハビリセンターの介護ノウハウ等の提供による支援を実施するにあたり、平成18年度にデイサービスを中心に、いくつかのJAにおいて実態調査（JA共済連からの委託）を実施し事前の検証を行った。その主な結果については、次のとおりであった。

- (1) デイサービスにおけるサービス提供全般（問題点）について
  - 1) 利用者の生活機能の維持や向上をはかるための効果的な対応が十分ではない状況が見受けられた。
  - 2) 利用者個々に対する通所介護サービス計画書はあるものの、目標設定等の計画内容や、計画にもとづく介護職員の援助が十分とはいえない状況が見受けられた。
- (2) 機能訓練について
  - 1) 現状  
機能訓練について、調査JAの多くが個別機能訓練の報酬加算を申請していた。指導者としては看護師が多く、集合訓練、個別訓練を合わせて実施しているところが多かった。またストレッチ体操や簡単な道具を使用した機能訓練の実施が多く見られた。
  - 2) 問題点
    - ① 機能訓練、特に個々の利用者に合わせて訓練について、訓練指導の職員、介護職員の知識、技術が十分に発揮されていない状況が見受けられた。
    - ② 利用者個別の機能訓練計画の策定、それにもとづくサービスの提供、その後の実施状況の記録、一定期間毎の評価・見直しという、利用者の生活機能の自立への支援にむすびつくプロセスが十分に確立されていない状況、プロセスへの介護職員の参画が少ない状況が見受けられた。

③ 平成18年4月から個別機能訓練の報酬加算が実施されたこともあって、機能訓練の計画、方法、内容、記録等の実務について、試行錯誤をしている状況であった。

(3) 介護サービスへの支援への要望について  
JAの担当、責任者、介護職員からは、リハビリセンターによる機能訓練を中心とした介護サービスへの支援を強く望まれた。また、生活機能（機能訓練以外）向上の関する相談・助言等の介護サービスへの支援も望まれた。

＜望まれた主な支援内容＞

- 1) 通所介護サービスの業務、リハビリテーションの基本的な教育
- 2) 機能訓練の実務 実施、メニュー・プログラムの紹介、サービス提供の留意点等
- 3) 利用者個々への訓練に対する相談・助言（職員が指導する場合に）
- 4) 機能訓練の指導職員、介護職員への具体的な実地的助言
- 5) 利用者への生活機能（機能訓練以外）向上の関する相談・助言（職員が指導する場合に）
- 6) 送迎、入浴サービスに関するマニュアル整備への助言など

以上の調査結果から、リハビリセンターに蓄積されたノウハウの活用余地は大きいことがわかった。

具体的には、機能訓練に関する計画書の記載内容・記録・評価などの実務的な事柄や、利用者訓練に関する技能・技術的な事柄に対する課題の抽出および対応策の助言等に加え、通所リハビリテーションセンターとしての長年の経験がデイサービス内容などの運営的な事柄についても有効であることが確認された。

JAの介護サービスのこれらの領域を支援

することによって、利用者に対してより質の高いサービスを提供できると考えられる。

## 2. JAの介護サービスへの支援実施について

平成18年度の調査研究結果をふまえて、平成19年度下期から「中伊豆、別府の両りハビリテーションセンターによる介護ノウハウ等の提供」として実施を開始したが、その介護ノウハウ等の提供に関する主な内容（例）と形態、事例については次のとおりである。

### (1) 主な内容（例）

#### 1) 基本的なことについて

- ① 通所介護等サービス業務の基本的な研修（考え方、役割、すすめ方など）
- ② 機能訓練等に関する基本的な研修（目的、すすめ方、身体障害者・高齢者の身体機能の知識など）

#### 2) 機能訓練・レクリエーションについて

- ① プログラム・メニュー
- ② 実施方法、サービス提供の留意点等
- ③ 訓練等の技術・方法等
- ④ 利用者個々に対してのサービス提供方法等（職員向け）
- ⑤ サービス提供の書類・記録等（計画書、実施報告等）

#### 3) その他

- ① 送迎、入浴サービスなどのサービス提供方法等
- ② 介護技術（移動、排泄等）
- ③ その他日頃のサービス提供業務での悩み等（助言）

### (2) 形態

- 1) リハビリセンターの介護専門職によるJA等への個別指導の実施
- 2) JAの介護事業に携わる人材を集めた両りハ等での研修会の開催
- 3) 1)、2)のJA等に対するリハビリセンターによる事後指導、相談対応（JA

とりハビリセンターの間で随時実施（メール、FAX）

### (3) 事例

具体的な事例（デイサービスへの個別指導の場合）は別紙のとおりである。（J A名等は仮称）

### おわりに

この支援サービスは、リハビリセンターに蓄積されているノウハウをベースとした“ソフト・インフラ”であり、J Aの介護事業に対する支援対象の範囲を、その立ち上げ時だけでなく、実際のサービス提供等の業務支援にまで広げた「面的な支援」であることが特徴である。本稿の終わりにあたり、その期待効果について考えてみたい。

まず、J Aにとっては、リハビリセンターからの研修・助言によるJ Aの介護職員等のスキルアップを通じて利用者の生活機能の維持・向上が図られることによって、次のようなメリットが期待できるだろう。

・利用者ニーズに沿った機能維持・改善サー

ビスへの対応力強化

- ・ J A介護事業の経営基盤の強化（機能訓練サービスの向上による個別機能訓練加算等の報酬）
- ・ サービス面・事業経営面の双方の強化を通じた J A介護事業への信頼性向上  
また、J A共済事業にとっても次のようなメリットが期待できよう。
- ・ リハビリセンター機能の地域還元による J A共済事業の社会的信頼性の向上
- ・ J A共済の高齢者保障仕組みの開発等への情報面でのフィードバック

現状においては、支援サービスを継続的かつ円滑に提供するための体制づくり、支援活動を通じて得られた情報や新たなノウハウの還元の仕方など、今後に向けた課題はあるが、以上のような実施効果を創出するためにも、利用者とJ Aのニーズに沿ったサービスを着実に展開していくことが重要であると考え

農協共済 中伊豆・別府リハビリテーションセンターによる介護ノウハウ等の提供にかかる事例紹介資料  
(JA共済連JA向け資料 平成19年12月)

事例

## 個別機能訓練の導入に向けて

### ～まずは利用者のことを全職員で知ろう

JAふくし(仮称)

JAふくしデイサービスセンター(仮称)は、利用者の機能を最大限残そうと、個別機能訓練の導入を目指しています。研修では、個別機能訓練の導入にあたって必要な「情報の共有化」「残存機能を発揮するための工夫」などについて助言・指導がありました。

■事業・サービスの概要

施設の特徴出したい

施設は2000年に開設しました。定員は1日30人で、現在の利用者数は平均17人。利用者登録数が60人のうちJA組合員は2割で、地域住民の利用が多数です。職員は介護職員5人、看護職員2人、調理職員1人の計8人でサービス提供をします。

施設では07年3月まで個別機能訓練に伴う報酬加算を受けていましたが、県の指導基準が4月に改正されてからは、個別機能訓練加算を申請していません。施設では県の指導基準に沿って、個別機能訓練を再び導入したいと考えています。

施設の特徴の一つに、JAらしさがあります。昼食の米はJA取り扱いの地元産米を100%取り入れ、地産地消を後押ししています。料金は1食400円。他の事業所が500～900円であることと比べると低額です。食事の量も、利用者から「ちょうど良い」と評判です。



レクリエーションを楽しむ利用者

介護事業の問題点は、JA組合員の認知度が低いことです。06年に実施したアンケートによると、JAが福祉事業・活動を行っていることへの認知度は全体の2～3割で、介護事業については1～15割と極めて低い数値でした。認知度を上げるためには「口コミで好評を得ることが効果的」で、そのためには「他には無いような、当施設としての特徴を出す必要があります。その1つに、利用者の機能を最大限残すための個別機能訓練が重要です」(施設長)と強調します。

事業概要	
開設	2000年
敷地面積	〇〇平方メートル
利用者定員	30人
1日あたりの利用者	平均17人
役職員数	9人(施設長1人+職員8人) 施設長はJA正職員。職員8人は施設の職員で、常勤6人・非常勤2人
職員担当内訳	介護関係職員5人 看護職員2人 調理職員1人
資格者内訳(看護職資格を除く)	社会福祉主事2人 介護福祉士2人 ホームヘルパー2人

■リハスタッフによる研修内容



リハ専門員が体操の仕方を指導した

〈レクリエーション時の助言・指導〉

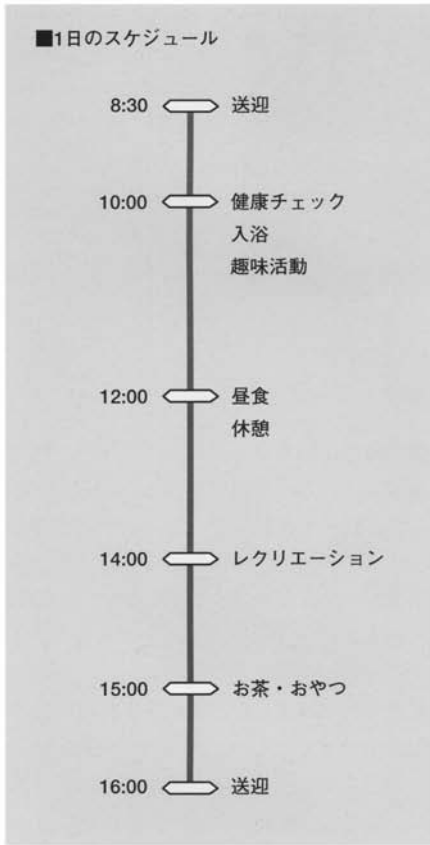
効果的な体操方法を学ぶ

施設では午後のレクリエーションの時間に、いすに座ってできる手足の体操を集団で行います。研修当日はこの体操のより効果的な方法を知ろうとする施設職員の要望で、\*リハ専門員による体操の例の紹介がありました。

「太ももの筋肉を鍛えると、ひざの痛みを和らげる効果があります」。リハ専門員はいすに座ったまま足をまっすぐに伸ばし、つま先を3秒間体に向ける方法を紹介。また、「足のむくみにはふくらはぎの運動が効果的」(リハ専門員)で、いすに座って足を床につけ、かかとを10回上げる方法を紹介しました。転倒防止には、「足の指を鍛えると効果的」(リハ専門員)で、足の指の側面を手の指でつまんで回すなどの方法を説明しました。

\*リハ：JA共済の関連組織の社会福祉法人農協共済中伊豆リハビリテーションセンター、同別府リハビリテーションセンターをいう。

■1日のスケジュール



■JA概要

JAふくし（仮称）は松島の竹市と梅町が管内。正組合員は54321人、准組合員は9876人。農業は、南部は稲作、北部は園芸作物が盛ん。○年オープンした直売所は県内有数の大型施設で、県内外の利用者で賑わっている。



食事も、食器の取り入れ方を工夫すれば自立支援を促せる

〈職員への講義(利用者へのサービス終了後)〉

まずは利用者理解を

——機能訓練について、どのようなプログラムや方法がありますか。

「工夫しながら、自分らしく生活すること」。リハビリは、失われた機能を再獲得するだけではありません。利用者が自分らしく生きるために自立支援をする。その1つの方法が、機能訓練です。

個別機能訓練に取り組むには、まず利用者1人ひとりを把握することが最も大切です。例えば、中伊豆リハビリテーションセンターでは職員全員で通所介護計画書を作っています。また利用者の日々の情報や計画を一覧表にして、職員全体での情報共有をしています。

——今日1日の流れの中で、改善すべきことは何ですか？

ポイントは①安全面への配慮②利用者が残存機能を発揮できる工夫を③男性利用者への配慮④施設の構造について——です。

安全面については、入浴サービスのときや昼食後の休憩のときに、利用者のいるフロアで職員の目がなくなるような工夫が必要です。また歩行補助では、利用者の状況にもよりますが、手引き歩行ではなく、杖や歩行器など補助具を導入してはどうか。他の事業所では

手引き歩行中に、他の利用者とはぶつかって転倒する事故がありました。

利用者が残存機能を発揮できる工夫については、食事であれば、ひじが曲がらない利用者にはパフェ用のスプーンを使ってみたり、利き手が不自由な利用者には角が立っている皿を出したりしてみると良いと思います。また、右肩が不自由な利用者が車椅子からベッドに移動するとき、利用者の左肩・左足から移動できるようにベッドの配置を工夫してみてください。

デイサービスの利用者は、体が動かなくなったためにやる事が無いという「役割障害」である方が多くいます。利用者の残存機能を残すためには、利用者には「役割」を与えることも大切です。昼の休憩後にタオルケットを畳んでもらっても良いし、雑巾をぬって小学校に寄付しても良いと思います。

男性利用者については、多くの通所介護事業所で利用率が2～3割と低くなっていますが、利用者が自分らしく過ごせる環境を作れると良いと思います。男性利用者が居心地の良い場所をいくつか作って提供するの1つの方法です。

建物の構造について、現在は洗面台が1つしかありませんが、もし今後改造することがあれば、洗面台の数を増やして口腔ケアを行っていくなどすると良いでしょう。

■研修を受けたJA職員の感想

- ・今まで、事業の改善点を聞きたくても聞く場所がなかった。第三者の方の助言の中には自分たちでも気づいていたことがあり、事業について自分自身考えなおす良い機会になった
- ・私たちが気づきにくい点を指摘していただいた
- ・リハの実践例を説明していただき、わかりやすかった
- ・介護の仕事は「しんどいけどやりがいがある」というリハ専門員の言葉が印象的だった。今までの経験から出た言葉だろう
- ・現場を確認していただいたからの指導だったので、参考になった
- ・個別のリハビリメニューには限界があると思っていたが、まだ検討方法があることを自覚した
- ・利用者1人ひとりの状態をスタッフ全員で把握したい
- ・リハの実践例「個人のリハビリメニューを、利用者の名札の裏に書く」ことを参考にした
- ・少しずつでも、職員が利用者の問題や目標を明確に知って共有できるように努力したい
- ・リハビリやレクリエーションで、作業や外出などの個別援助を取り入れたい
- ・通所介護計画を共有するため、リハでの実践例「カーデリック（利用者の基礎情報ファイル）」を参考に整備したい



個別機能訓練や介護の基本を学ぶ



■施設長の思い

施設長  
農協 共済さん(仮称)

利用者に残された機能を最大限引き出すお手伝いを、職員全員でさせていただいています。利用者1人ひとりに笑顔で接し、1日楽しく過ごしてもらえる雰囲気づくりを心がけています。利用者からは「アットホームだ」という声が多くあります。利用者とのコミュニケーションを常に取り、<sup>※</sup>信頼、を大切にしていきたいと思います。